

παιδεία  
φιλοσοφία

2/22 (水)

13:30-17:00

京都大学芝蘭会館別館 研修室

(<http://www.shirankai.or.jp/facilities/guide/index.html>)

定員50名(事前申込順)・参加費無料

次世代哲学教育研究会 第2回会合

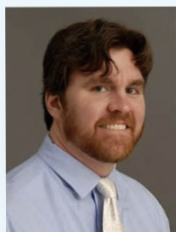
# 哲学教育を再考する

学位プログラム・学修成果・学修成果・学修成果・学修成果・学修成果・学修成果・学修成果・学修成果・学修成果

次世代哲学教育会は高等教育における哲学思想系教育を改善し、その意義を広く社会に伝えるために組織されました。

第2回会合では学位プログラム・学修成果・アセスメントの観点から哲学思想系教育について理解を深めるために、ジェームズ・マディソン大学 (JMU) よりケストン・フルチャー博士とアリソン・エイムズ博士をお招きしました。JMUは一般教育の学修成果アセスメントについて先導的な役割を果たしており、全米アクレディテーション協議会より3回表彰を受けています。またJMUが展開する倫理的推論プログラム「マディソン・コラボレイティヴ」は、市民性・公共性を涵養する優れた一般教育プログラムとして高く評価されており、二人はその設計・開発・評価において中心的な役割を果たしています。

哲学教育・倫理教育のみならず、一般教育カリキュラムやそのアセスメントについて関心を持つ方々の御参加も歓迎いたします。



Dr. Keston Fulcher (ジェームズ・マディソン大学 評価・リサーチセンターセンター長 心理学科准教授)

専門は教育心理学、学習の評価・測定。研究の関心は学習向上のためのアセスメント導入、メタアセスメント、ジェームズ・マディソン大学の倫理的推論プログラムの設計評価に関わると同時に、大学全体の学修成果の評価も監督する。著作に「Twelve Tips: Building High-Quality Assessment through Peer Review」(共著, Assessment Update 28-4, 2016), 「A Simple Model for Learning Improvement: Weigh Pig, Feed Pig, Weigh Pig」(共著, National Institute for Learning Outcomes Assessment, Occasional Paper 23, 2014)等。



Dr. Allison Jeniffer Ames (ジェームズ・マディソン大学 評価・リサーチセンター アセスメントスペシャリスト 補佐 心理学科助教)

専門は教育調査方法論。研究の関心領域として、ベイズ統計の項目反応理論モデル、項目反応理論におけるモデルとデータの適合性、事前評価。主著に「Food insecurity and educational achievement: A multilevel generalization of Poisson regression」(共著, International Journal of Food and Agricultural Economics, 4(1)), 「An NCMIE Instructional Module on IRT Item-Fit Analysis」(Educational Measurement: Issues and Practice, 34(2))等。



渡邊 浩一 (大阪経済法科大学 教養部 特別専任准教授)

専門は西洋近代哲学史。特にカント及び新カント派に定位して、認識論史の読み直しに取り組んでいる。著作物は『『純粋理性批判』の方法と原理』(京都大学学術出版会), 「『知識基盤社会』における「学士課程教育」: 基本概念の批判的検討」『現代社会研究』16 など。



坂本 尚志 (京都薬科大学 一般教育分野 准教授)

専門は20世紀フランス思想史。主にミシェル・フーコーの思想を対象とした研究を行っている。同時に、フランス・バカロレ哲学試験の研究を通じて、哲学教育におけるライティング指導の方法の開発を進めている。主著に「バカロレ哲学試験は何を評価しているか? 受験対策参考書からの考察」『京都大学高等教育研究』18号, 「「他者とともにあること」の歴史性—フーコーと共同体の問い」(岩野卓司編『共にあること』の哲学—フランス現代思想が問う〈共同体の危険と希望〉1 理論編』書肆心水)等。



田中 一孝 (桜美林大学 リベラルアーツ学群 講師)

専門は西洋古代哲学史。主としてプラトンの思想、西洋の芸術思想に関わる概念史。次世代教育研究会を立ち上げ、高等教育における哲学の学修成果の検討と学位プログラムの改善に取り組む。著作物に『プラトンとミーメシス』(京都大学学術出版会), 「Divine Mortality and Mortal Immortality in Plato's Symposium」 in M. Tulli and M. Erler (eds.), Plato in Symposium, Academia Verlag, 等。



畑野 快(大阪府立大学 高等教育開発センター 特認助教)

専門はアイデンティティ論、青年心理学。青年期から成人期にかけてのアイデンティティ発達の実証的解明を基盤とし、その発達的変化と学習への意欲、態度との関連を検討している。主著に「『Which come first, personality traits or identity processes during early and middle adolescence?』(Journal of Research in Personality), 『Looking at the dark and bright side of identity formation: New insights from adolescents and emerging adults in Japan.』(Journal of Adolescence), 『達成目標: 前向きな目標をもつ子どもを育てるために』(中間玲子編自尊感情の心理学: 理解を深める取扱説明書, 金子書房)など。

# 哲学教育を再考する

～学位プログラム・学修成果・アセスメントの観点から～

## タイムテーブル (13:30-17:00)

13:30	田中 一孝 (桜美林大学)	開会挨拶
<b>セッション1：講演</b>		
13:35	Dr. Keston Fulcher & Dr. Allison Jeniffer Ames (James Madison University)	「倫理的推論：その定義、教育、アセスメント "Ethical Reasoning: Defining, Teaching, Assessing"」 (要旨) 「倫理的推論 (Ethical Reasoning)」は非常に多くの高等教育機関によって重要なスキルとして位置付けられるものである。だがこうした認識をよそに、しばしば倫理的推論はその定義や、アセスメント、教育的戦略を欠いており、大学全体として効果的に倫理的推論教育に取り組んだ事例はほとんど見られない。ジェームズ・マディソン大学は5年前、認証評価機関に促される形で倫理的推論の教育プログラムを展開し始めた。そして今日では、大学全体として学生の倫理的推論スキルが向上していることがアセスメント・エビデンスによって明らかになっている。出席者には倫理的推論の定義、四つのアセスメントツール、そして倫理的推論教育を前進させるための戦略を理解してもらう。学生の重要かつチャレンジングな学習の場面を広げるために、どうすれば教育機関は学びの仕組みを作り出していけるだろうか。本セミナーではそれを明らかにしていく。 ※本発表は英語で行われます。会場通訳はありません。
14:35		休憩
14:45	渡邊 浩一 (大阪経済法科大学)	「哲学教育について何が語られてきたか」
15:00	坂本 尚志 (京都薬科大学)	「医療系大学における哲学教育の方法を考える」
15:15	田中 一孝 (桜美林大学)	「哲学教育における学修目標を定め、学修成果を測る」
15:30	畑野 快 (大阪府立大学)	「哲学的能力尺度作成の試み」
15:45		休憩
<b>セッション2：ディスカッション</b>		
15:50	パネルディスカッション・全体質疑応答 コメンテーター：深堀聡子 (国立教育政策研究所 高等教育研究 部長/チューニング情報拠点 代表)	
16:50	田中 一孝 (桜美林大学)	閉会挨拶

## 参加お申込み

参加を御希望の方は下記情報を含む電子メールを国立教育政策研究所チューニング情報拠点 (tuning@nier.go.jp) 宛てにお送りください。

標題：「哲学教育を再考する参加申込み」

本文：①御氏名、②御所属

## アクセス

関西空港より京都駅へ JR 関空特急「はるか」で約 75 分

京都市バス：JR 京都駅より市バス D2 のりば (206 号系統)

阪急河原町駅、京阪祇園四条駅より (201, 31 系統)

京大正門前下車徒歩約 2 分

京阪電車：出町柳駅下車徒歩 15 分

※駐車スペースがございませんので、公共交通機関の御利用をお願いいたします。



お問い合わせ先：国立教育政策研究所チューニング情報拠点 (tuning@nier.go.jp)